

令和2年度 研究の概要

1 研究主題

「主体的に言葉に関わりながら、確かな読みの力を身に付ける児童の育成」
～国語科における「読むこと」の指導の充実を通して～

2 主題設定の理由

以下の3つの観点から本主題を設定した。

(1) 学習指導要領改訂の趣旨から

平成29年度に告示され、令和2年度より全面実施となった新学習指導要領 1 改訂の経緯及び基本方針 (2) 改訂の基本方針 ① 改訂の基本的な考え方には、

「子どもたちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成すること」

「知識の理解の質を更に高め、確かな学力を育成すること」

と示されている。また、② 育成を目指す資質・能力の明確化には、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力として、

ア「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」

イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」

ウ「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」

の三つの柱が示され、③「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進には、アはもちろん、

イ「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点で授業改善を進めるものであること

ウ 通常行われている学習活動の質を向上させること

エ 1 回 1 回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること

オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすること

カ 基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を図ることを重視することが明示された。

これは、児童が将来社会的に自立する際に必要となる知識及び技能の量と質を充実させ、それを活用して児童自身が自分の生活をより良いものにしていく能力の育成が学校に求められていることを示している。

今回の指導要領改訂は学校教育における大きな転換点であり、「意欲」「知識・技能」重視の教育から「活用力・応用力・対応力・適応力」を育てる教育への移行と捉えることができる。これらの能力は、Society5.0の社会の中で、自立した生活を営む上で必要不可欠なものである。

本研究において「主体的に言葉にかかわる」ことができるよう授業を改善すると共に、国語についての知識及び技能を基盤とした「確かな読みの力」を身に付けさせていくことで、「知識・技能」を習得させ、それを活用するための「思考力・判断力・表現力」を養い、学びをより良い人生につなげる「学びに向かう力・人間性」を培うことができると考える。

(2) 学校経営グランドデザインから

前述の学習指導要領の趣旨を踏まえて示された宮城県教育基本方針と登米市の教育基本方針を受け、石越小学校学校経営グランドデザインが示されている。その中で日々の授業改善の視点となるのは、以下の項目である。

- ① 授業の充実
- ② 「分かる」が実感できる授業
- ③ 問いを発する子どもの育成
- ④ 「分かりません」と言える授業
- ⑤ 家庭学習への理解と充実
- ⑥ 学習規律の習慣化
- ⑦ 自己決定の場の設定
- ⑧ 読書指導の充実

ここに示された「分かる」が実感できる授業、問いや「分かりません」という声を素直に発することができる授業は、児童が安心して学ぶことができる授業である。また、児童が生き生きと主体的に学習に向かうことができる授業でもある。そのような授業を作り上げるためには、児童の語彙力を高め、言語環境を整えることは必須の条件であり、研究主題につながるものだと考える。

(3) 児童の実態から

令和元年度 全国学力調査の結果は、下表の通りである。

	話す・聞く	書く	読む	言語文化	全体
石越小正答率	65.5	43.7	80.5	57.2	61
全国正答率	72.3	54.5	81.7	53.5	63.6
全国との乖離	-6.8	-10.8	-1.2	3.7	-2.6

有意差の認められる項目は「話す・聞く」「書く」であった。「言語文化」については3.7ポイント上回っている。設問別に見ると、「目的に応じて質問を工夫することができるかどうか」の問題で25.2ポイント、接続詞「そこで」を使って2文に分けて書き直す問題では15.5ポイント、二つの資料を取り上げて、それぞれどのような目的で用いているか判断する問題では9.9ポイント下回っている。文章の意味は分かるものの、設問の意味が理解できず、誤答につながっている様子も見られる。全国的な傾向として、小学校では文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること、目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることなどに課題があることが明らかになっている。本校でも同様の傾向が認められており、主語や述語、品詞の理解や文章の構成、表現の工夫に着目して読み解くこと、文章の要旨を捉えること等が課題と言える。

令和元年度 登米市標準学力調査の結果は、下表の通りである。

4年	全体	関・意・態	話す聞く	書く	読む	言語
本校正答率	80.8	72.7	79.7	69.8	67.9	90.8
全国正答率	74.8	64.6	82.8	55.2	71.4	81.1
全国との乖離	6	8.1	-3.1	14.6	-3.5	9.7

5年	全体	関・意・態	話す聞く	書く	読む	言語
本校正答率	65.3	64.8	61.7	64.7	56.8	69.2
全国正答率	72.0	70.4	73.3	66.1	70.7	73.0
全国との乖離	-6.7	-5.6	-11.6	-1.4	-13.9	-3.8

6年	全体	関・意・態	話す聞く	書く	読む	言語
本校正答率	72.3	68.6	74.6	65.3	69.2	74.0
全国正答率	75.2	73.2	74.3	71.1	79.9	71.9
全国との乖離	-2.9	-4.6	0.3	-5.8	-10.7	2.1

有意差が見られたのは、主に「関心・意欲・態度」「話す・聞く」「読む」領域であった。特に5年生（現6年生）の有意差が大きい。複文節の文章の意味理解や段落全体としての意味理解、段落相互の関連付け等、文章全体の意味を捉えることが難しいようであった。

また、日常の授業では「言葉の意味が分からない」「設問文の意味が分からない」「漢字は読めるが意味が分からない」という様子が見られ、文章の読み取りの力だけではなく、日常生活で使うことができる語彙の不足が正答率の低さの要因の一つになっていると考えられる。

児童はスマホネイティブ・タブレットネイティブ世代であり、ここ十数年の情報インフラの飛躍的な発展も手伝い、本離れや文字離れが著しい。動画メディアの浸透もこの傾向に拍車をかけている。本離れが文字離れにつながり、語彙が不足し、ネットの情報も動画視聴に頼ってしまい、さらに文字離れが加速するというマイナススパイラルを引き起こしている。

このような現状の中、文意を正しく読み取る知識や技能を身に付けさせる事は、本校の教育における課題の一つであり、研究主題に沿うものであると考える。

3 研究主題について

研究主題の文言を次のように捉え、研究を深めていく。

(1) 「主体的」

学習課題の目的や必要性を理解し、国語についての知識を拡充しながら、読み取りの技能を高め、身に付けた知識及び技能を活用して学習に取り組む姿と捉える。

(2) 「言葉にかかわる」

習得した知識及び技能を活用しながら、適切な言葉を使って考え、表現し、意見を交流する中で、他者の意見を認め、自身の意見と比較し、更に考えを深めていく姿と捉える。

(3) 「確かな読みの力」

語彙や語句の意味、文法といった知識と文章を読解する技能を基盤として、文や段落、文章の内容・要旨を正しく読み取ることや、叙述や描写に沿って場面や心情を想像し、読み味わうことと捉える。また、重要語句や文、段落相互の関係、文章の構成、表現の工夫に着目し、想像を広げ、考えや思いをまとめ、広げていくことと捉える。

また、上記「言葉にかかわる」に記した「考える」「表現する」「意見交流する」ことについては下表のように捉える。

	考える	表現する	意見交流する
低学年	言葉や文のつながりを考える。	経験や想像、感想を話したり書いたりする。	相手の考えに興味をもち、尋ねたり応答したりする。
中学年	中心となる語や文、文と文や段落のつながりに着目して考える。	理由や例を挙げながら話したり書いたりする。	異なる考えを認め、感想を話したり質問したりする。
高学年	文章の構成や表現の工夫に着目して考える。	自分の考えと比較し、意見を話したり書いたりする。	助言や提案をしながら、考えを深める。

4 研究目標

主体的に言葉にかかわらせながら、確かな読みの力を身に付けさせる指導の在り方を明らかにする。

5 研究の内容と方法

目指す児童像に近づけるための具体的な手立てを、研究の視点に基づく授業改善を通して明らかにする。

6 目指す児童像

「主体的に言葉にかかわりながら、文章を正しく読み取り、
思いや考えを広げ、表現する子ども」

低学年	言葉や文のつながりを考えながら読み、想像を広げたり表現したりする子ども
中学年	中心となる語や文、文と文や段落のつながりに着目して読み、自分の考えや思いをまとめ、表現する子ども
高学年	文章の構成や表現の工夫に着目して内容・要旨を捉え、自分の考えや思いを広げ、表現する子ども

7 研究の視点

以下の視点で授業改善を行い、授業実践を重ねる中で、具体的な手立ての有用性を明らかにする。

(1) 主体的に言葉にかかわらせる指導の工夫

- ① 興味・関心を高め、課題に対する目的や必要性を感じさせる手立て
- ② 自分の考えや思いをもたせる手立て
- ③ 意見交流の中で、新たな発見を促す手立て

具体例実践例	児童の「問い」を活用した学習計画や課題の提示／ワークシートの活用／読みを深める発問の工夫
--------	--

(2) 文章を正しく読み取らせる指導の工夫

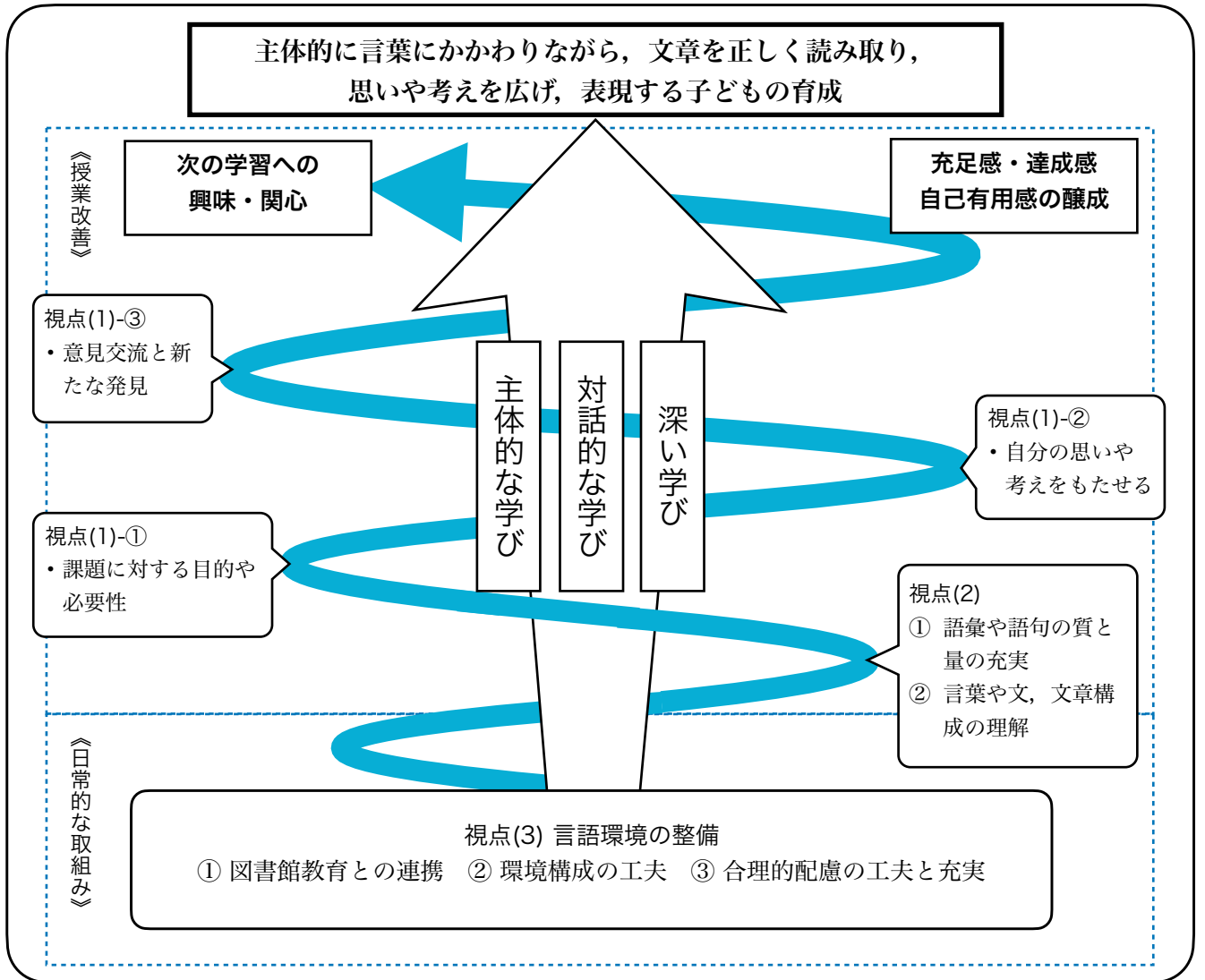
- ① 語彙や語句の量と質を充実させる手立て
- ② 言葉や文、文章の構成に気付かせ、正しく読み取らせる手立て

具体例実践例	音読の充実／国語辞典の活用／サイドラインの活用
--------	-------------------------

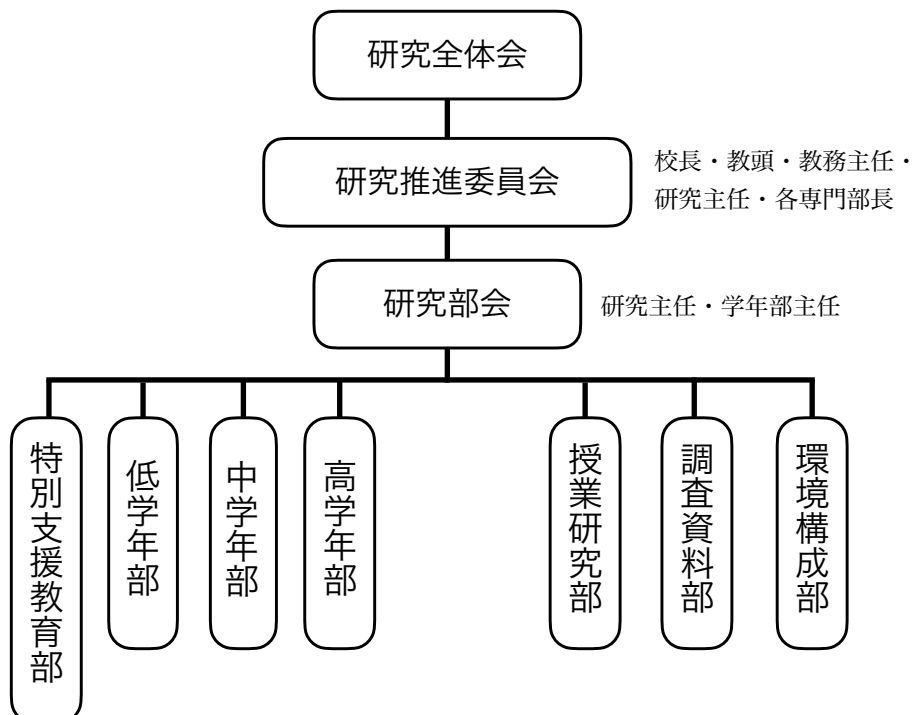
(3) 言語環境の整備

- ① 図書館教育との連携
- ② 環境構成（教室掲示・廊下掲示）の工夫
- ③ 日常の授業における合理的配慮の工夫と充実

8 研究構想図



9 研究組織



10 研究計画

	研究授業予定	研究内容	備考
4月	—	研究の方向付け 学年部会（目指す児童像設定）	
5月	—	研究の概要づくり 文献研究	
6月	—	第1回 意識調査実施（調査資料部） 環境構成（環境構成部）	
7・8月	—	学年部協働による授業研究 研究主題・副題・視点等の修正	
9月	授業1（2年）	学年部協働による授業研究と授業実践	
10月	—	指導主事訪問 指導案検討会	
11月2日（月） 11月中～下旬	授業2（4年） 授業3（6年）	学年部協働による授業研究と授業実践	指導主事訪問
12月	授業4（1年）	学年部協働による授業研究と授業実践	
1月	授業5（5年） 授業6（3年）	学年部協働による授業研究と授業実践	
2月	特別支援学級 （5学級/1~2時間）	第2回 意識調査実施（調査資料部） 研究のまとめ原稿作成	特別支援学級の 授業は同日に行 う。
3月	—	研究のまとめ完成／次年度の研究について の見通し	

11 令和2年度の研究の経緯

4月2日（木）	研究全体会	児童の実態・研究の方向性の確認
4月14日（水）	学年部会	研究主題・副題・目指す児童像・専門部所属についての話し合い
5月1日（金）	研究部会	主題・副題・目指す児童像・視点について（原案作成）
5月25日（月）	職員会議	研究の概要提示
8月21日（金）	研究部会	目指す児童像・研究の視点について（見直し）
9月2日（水）	打合せ	研究の概要（修正案）提示
9月4日（金）	第1回 研究授業 事後検討会	2年「ニャーゴ」
11月2日（月）	第2回 研究授業 （指導主事訪問）	4年「くらしの中の『和』と『洋』について調べよう」
12月10日（木）	第3回 研究授業 （自由参観授業）	6年「ヒロシマのうた」

1月28日(木)	第4回 研究授業 (自由参観授業)	1年「子どもをまもるどうぶつたち」
2月2日(火)	第5回 研究授業 (自由参観授業)	5年「『弱いロボット』だからできること」
2月22日(月)	研究全体会	研究の振り返りと次年度の研究について